

Newsletter

JUN. 1999

<http://www.aack.or.jp>

AAACK総会出席の皆様へ

斎藤 惇生 (在北京)

本日総会出席の予定でしたが、日本山岳会会員で編成された日本リャンカンカンリ登山隊が無事成功(十名登頂)して、十九日北京に帰着し、小生、出迎えと中国側に挨拶の為、二十一日から北京にきています。二十三日帰国しますが、閑空には夕刻着となり、総会も懇親会も間に合いません。FAXで挨拶致します。

小生、九十七年五月に第十九代の日本山岳会会長に就任しましたが、本年五月十五日の総会で二年の任期が終わり退任しました。この間、AAACKの皆さんの御支援御協力有難うございました。歴代会長には松方三郎、今西錦司、西堀栄三郎、今西寿雄、藤平正夫の先輩達がきら星のように名を連ねておられます。AAACKの名譽を汚さぬよう、これら大先輩の名を辱めぬよう努力したつもりです。が、その功罪については歴史の評価を待つのみです。

日本リャンカンカンリ登山隊は、最初中国よりブータン国境のガンカーブンスム峰の登山許可が出たのですが、ブータン国よりブータンの聖山であること、中国より登ってもブータンの主張しているブータン領を通過することになると抗議があり、中国政府はブータン国民の感情(宗教的)を考慮して延期を指示してきました。そして約三キロメートル北のリャンカンカンリ(七五三四メートル)を許可しました。日本山岳会内部で、そのような領土問題が未だ解決していない地域の山には社団法人である日本山岳会が登山隊を出すべきでないとの意見を述べる人がいて、このため日本山岳会の派遣

でなく、財政的にも独立した日本リャンカンカンリ登山隊として派遣しました。梅里雪山の隊員であった小林尚礼は、ガンカーブンスムの計画が始まった時より隊員として推薦しました。幸い準備中より頑張り、リャンカンカンリも第二次登頂隊員となり、五月十日無事登頂しました。彼は写真のプロになると頑張っていますが、今回の山でも写真を撮りまくったようです。引き締まった顔と身体で帰ってきています。何か輝いているように見えるのは晶屑目でしょうか。

財政的に独立した隊でしたので、AAACKの皆様は御協力をお願いしました。多くの賛助を頂きありがとうございます。次に小林に報告と御礼を書かせます。

AAACKの皆様へ

この度日本リャンカンカンリ登山隊の一員として同峰に初登頂することができました。皆様方の暖かい御支援に感謝いたします。初めて体験する七千メートルの標高は、予想以上にきついものでしたが、山頂に立ち、尾根筋の先にあるガンカーブンスムを見た時には大きな未知の世界を感じました。このようなチャンスをお握りかけを与えてくれた京大山岳部、そしてAAACKに心から御礼を申しあげます。ありがとうございます。これからもより大きな充実感を目指して挑戦して行きたいと思っています。

小林尚礼

「雪山讃歌」の歌詞著作権由来記

高村 奉 樹

この冬、AACCKホームページの伝言板に、沖津が関東グループのスキー山行計画として鹿沢行きを掲示して、参加をよびかけていた。鹿沢温泉の紅葉館には「雪山讃歌」の歌碑があるそうで、今回はその歌碑に献花し、正調「雪よ岩よ」を捧げたいという。これを見て、歌の発祥地が少し気になり、東京の森本に一寸問題があるかも知れないとおせっかいなメールを入れておいた。実はチヨゴリザ遠征のあと大学院に滞留していた頃に、わたくしは、この歌詞の著作権取得の仕事のごく一部を手伝ったのだが、うろ覚えでは、歌詞が作られたのは、新潟の関温泉となっていたように思ったからである。

この歌については、伊藤宏範も話しているように、会費とともにかねてよりその著作権料収入が会運営の上に占める重要性は大きい。(AACCKの現状と将来を考える―座談会の記録―。ニューズレター No.5 一九九七 Mar.)。さらに伊藤は土倉さんの追悼文のなかにもこのことについて触れ、AACCKが文部省認可の法人となった一九六〇年、その同じ年に発行された一枚の文書、著作権信託証書について紹介している。(追悼 土倉九三、一九九七)。AACCK時報の編集を担当していた伊藤は、一九九三年頃、土倉さんから「残された文書のなかには全くふれられてはいない

が、「雪山讃歌」の著作権をAACCKにとろうと考えたのは僕だ」といわれたが、「詳しいことも聞かずにそのままになってしまった。残念なことをしたと思う。」と記している。その後、伊藤は何人かの人に尋ねたらしいが、著作権取得のアイデア誕生から、かなり面倒な事務作業を経て「著作権を認められた経緯」の中の土倉さんの関与はわからなかった。決して表に出てこないところが土倉さんらしい。」としており、これが京都大学学士山岳会国際登山探検文献センターの安くはない借室料を毎年、まかなうのに補助的な役割を果たしていることを以て、「土倉さん、ありがとうございました」と追悼文を結んでいる。

当事者の殆どが過去の人となっており、わたくしもどうやら老世代に属している現在、当時のことを少しは知る者として、この機会に「雪山讃歌」の発祥と著作権取得のことについて整理しておくことが、おせっかいながら義務かと考える。また回顧趣味のそしりをまぬかれないことを覚悟のうえで、幾人かのひとびとの協力を得て、それらにまつわる一文を記すことにした。

まず山岳会の海外遠征や法人化をはじめ永年お世話になっている近藤良夫元会長に伺った。著作権取得の詳しい経過は知らないが、以前、一九九三年に八三歳でなくなった工業栄司さんへの追悼

文に歌のことを書いた、と即座に文献を教えてくださいださった。さすがは近藤先生、記録はすべてみごとに整理されている。早速酒井さんに頼んで原文コピーをお願いした。「工業さんは、一九二七年に第三高等学校に入学し、山岳部に入学して登山活動を始めた。『三高歌集』一九七八』によると、「吹雪のする日はほんとに辛い」で始まる山岳部歌が出来たのはこの年であるから、工業さんはきつと西堀英三郎さんなどと関温泉で一緒に合宿して、あの眼を輝かしながら、この歌を声高で歌っておられたに違いない。工業さんはこのスキー合宿で会計をつとめている。」(山岳 第八十九年、二二〇―二二一ページ)近藤先生は、この歌の著作権が問題になったのは、アンナプルナⅣの遠征以来停滞していた会として、チヨゴリザ成功を機にまたヒマラヤへの意気があがった頃で、チヨゴリザ帰りの桑原先生がなにかと活躍された時期だったな、と当時の様子をまとめてくださった。

そういえば一九六〇年は五八年のチヨゴリザについて、酒井弥二郎先生ひきいるパミール高原学術調査隊がノシヤックにむかった年である。登頂は八月だが、神戸港から大型ジープはじめ装備などを船積みしたのは五月で、留守番役は荻野和彦を中心とする若手である。酒井、岩坪はたぶん五月頃から日本を留守にした。その酒井先生が雪山讃歌の由来を確か文芸春秋の随筆欄に記し、それが著作権取得のための裏付けのひとつになったということを、聞いたことがある。これは以前から調べたいと思っていた資料だ。この三月、胆囊と胆石摘出のため一月以上入院してしまったが、酒井さんはさきほどのコピーとともに、西堀栄三郎選集第2巻『未知なる山・未知なる極地』(悠々社刊、一九九一年)を見舞いかたがた届けてくださった。そこには文字どおり「雪山讃歌」を歌詞

この石碑は鹿沢温泉紅葉館近く、道路そばに「雪山讃歌発祥の地」として婦恋村が建立したもので西堀栄三郎氏直筆の台字が刻まれている。



5月31日、現地にて新井撮影。

したところ（初出『山と高原』一九五六年一月号ママ）の文章があり、西堀さん自身がまさに作詞のことを記している。時代は昭和のはじめ、西堀さんたちが、三高を終えて京大に入った頃、赤倉、鹿沢、五色では二、三回、京大だけでなく東大と合同でスキー合宿が行われた。笹ヶ峰にヒュッテができた頃でもある。

「合宿が終って新鹿沢に泊まった。吹雪で滞在をよぎなくされたある日、四手井綱彦君や渡辺漸君と共に学校の山岳部の歌をつくらうではないかと提案した。しかし、わたしを始めこの連中は、およそ文才のない奴ばかりである。別に誰にほめてもらおうというわけではないので、でたらめな文句をならべた。その頃ラッセルをやりながらよく歌った「オー・マイ・ダーリン・クレメンタイン」の曲が気に入っていたので、その曲にいうように。誰がどの文句をつくったかは忘れてしまったが、どれも合作であつたようだ。薄暗い部屋で、四手井君が一句一句できるはしから書き留めていたのを思い出す。」

ところでなぜいとしのクレメンタインなのか。外人教師が三高の英語の時間にこの歌を教えてくれたのや、とこれは昔今西さんに聞いたように思う。

間もなく西堀さんら昭三組は社会に出て、「あの歌をうたうこともなくなったが、それを受けついで三高山岳部の若手連がいつとはなしに歌いなれ、それを三高の校歌集に組入れた。そして誰かが「雪山讃歌」という題をつけた。何代かを経ていたので、読み人知らずとして。」歌詞ができた場所はこれで特定された。

ではこの歌は三高の後進世代にその後どのような受けとめられていたのだろうか。そのことを推測させる文章をわたしはたまたま保存している。

「梅棹さんとうたった歌 和崎洋一（梅棹忠夫著作集）月報 五、一九九〇年七月」によると、一九六四年はじめの京都大学アフリカ学術調査隊人類班の調査も終わりに近づいたマンゴラのエヤシ基地では梅棹、富川と和崎が、夜気のなかで酒をくみ、戦前戦中からうたいついだ歌をうたいあつた。後日になってたしかめるが、梅棹さんはこの夜のことを失念しており和崎さんは残念そうである。「…そういえば、今西さんも、「音楽抜き」だが、みんなであうたいあう歌は大好きだった…」

中略 まず、山岳部歌のなから。…吹雪のする日はほんとにつらい／アイゼン付けるに手が凍えるよ／…（西堀栄三郎詞☆）、そんなにお前は何故嘆く／（ホーフマンスタール作、森陽外訳）、つづいて三高寮歌、「紅燃ゆる」「行春哀歌」と続く。」と記し、文末には、☆著作権協会許諾第9070346-0001号と雪山讃歌の登録番号が注記されている。ついでに紹介しておく、この三人に欠かせない歌として島崎藤村詩「初恋の歌」がでてくる。われわれの世代の結婚祝賀会の席で必ずといってよいほど、和崎さんはこの歌をはなむけとして感情こめて歌われたのだが、これは実は和崎洋一作曲なのだ。ただし著作権登録番号は付記されていないところを見ると、少々もったいない気がする。

さてわたくしが京都大学に入学した昭和二十八年には、宇治分校のバラック校舎で生物の久米教授が三高寮歌の指導をされた。新制高校から来たわれわれ新入は三高同窓会発行 昭和二十七年五月初版『三高歌集』を購入し、午どきの階段教室には旧制高校の歌が響いたわけである。教えて貰ったのは「春東山の花に酔い」くらいしか覚えていないが、そこには雪山讃歌が三高山岳部歌 読み人知らずとして掲載されていた。高校山岳部時

代に、上級生がつぶやくように歌うのを聞いたことがあるが、それはもつと単調で、日本の音頭のようなリズムであった。いわゆる正調の合唱を聞いたのは、間もなく出かけた金比羅山での新人歓迎会のことである。岩登り練習前夜、わたくしたち新人部員は、江文神社の社殿で焚き火とどぶろくで歓迎され、中島ダンナ、斉藤Yさん、新人係の菊池クメローさんらの先導でいつしか雪山讃歌の合唱の渦に巻き込まれていた。その後も夏山の豪勢な焚き火をかこみ、とくに冬の笹が峰のストーブを囲むときの意気盛んな合唱。冬が似合うのも、歌詞に冬山登山の基本動作と感情が素直に読まれており、作られたときの雰囲気がいとも自然に伝わるからであろうか。

さて、作詞された場所である。関温泉とか、また妙高とか言われているが、京大ヒュッテもそのころに建設されているから、歌詞が継続的に創られ、複数の合宿地でブラッシュアップされたと考えるのが自然である。西堀さんの文章は読んでひととおり見当はついた。しかし今回はこの辺りについて、きっちりダメを押しておきたい。そこで退院後、ルームに残っている関係書類を吹田啓一郎に無理をいって取り出してもらった。日本音楽著作権協会会長 西条八十氏から社団法人京都大学学士山岳会あての著作権信託契約締結についての昭和三五年十月七日付け証書、送り状などが保存されている。しかしどういう形で申し入れたかについては資料がない。そこで当時の申請書が著作権協会に残っているはずと問い合わせているが、返事はいつになるのか。また酒戸さんの随筆を京都大学の本部図書館であらたに閲覧証を作ってもらって、地下二階の書庫で当時の文芸春秋約三年分をざっと調べたが目当ての文章にはまだ出会えない。焦る内に、締め切り厳守と編集担当新

井氏から告げられた。そこで念のため著作権協会の担当者へ昨日直接電話で問い合わせたところ、依頼の手紙は読んで資料を探索中という返事があり、その後一時間も経たぬうちに内国資料部 内国一課からファックスが届いた。資料はこれだけでしたという添え書きとともに、二通の確認書のコピーと、わたくしが探していた酒戸さんの随筆のコピーがちゃんと送られてきた。これで一挙にすべてが明らかになる。とりあえずお礼の電話をしたが、最近は大クダックスのメンバーのひとり佐々木氏が病気で、あまり歌われませんねと担当の矢嶋さんも残念そうであった。著作権料についての経過は今回は触れないことにしよう。とにかく四手井さんの確認書があるのは初めて知った。内容はつぎの通りで横書きである。

雑誌『文芸春秋』昭和35年5月号に掲載された酒戸弥二郎氏の「雪山讃歌の作者」に記載された事実は真実であります。

私は当時、京都帝国大学学生としてこの行に参加しておりましたが、昭和二年一月、吹雪に閉じこめられた鹿沢温泉の宿舎で西堀栄三郎氏が「雪山讃歌」を創作したことは上記酒戸氏の文章のとおりであり、爾後、旧三高山岳部部歌として歌われてきたものであることを確認いたします。

昭和三五年八月一七日

京都大学理学部教授

理学博士 四手井綱彦 印

もう一通もほぼ同文で、広島大学医学部長 医学博士 渡辺 漸で捺印されている。ちがいは「私は当時東京帝国大学学生としてこの行に参加し」というくだりと日付が同年八月十日となって

いることである。渡辺さんはわたくしが依頼状を出した相手、先輩である。たしか封書で送られた返事には当時の事情がペンで記されていたと思うのだが、最終的に提出された書類は、邦文タイプで打たれていた。いずれも酒戸さんの文章が鍵になっている。

さて、ここで両氏の確認書が対象としている酒戸さんの文章「雪山讃歌の作者」にはどんなことが書かれていたのだろうか。これで図書館地下通いから免れたという安堵感もあつて、読みずらいコピーを一気に読んだ。酒戸さんは、わたくしたちも「やじさん」と呼ばせてもらう気楽な先輩であつたが、日本茶の旨味の成分、テアニンを茶葉から抽出し同定することによって日本農学賞を受けた化学者である。また書かれる文章は辛辣ではあるが、たいそう軽妙であつた。送られてきたコピーは、実は文春文庫に収録された文芸春秋「巻頭随筆(Ⅱ)」一九八〇年三月刊、の三五―三五三ページに掲載されたもので、はじめの肩書きは(静岡大学教授)だが文章末尾には(故人)と記されている。著作権申請時の初出版ではなく後に出版されたものが資料になっているのは何故だろう。いまはそれはさておき、とにかく読もう。「黒沢明の『生きる』という映画の中で、吉井勇作の『命短し恋せよ乙女』という歌を、無断使用したというので問題が起り、なにがしかの使用料を払って落着いたとか聞いている。この話を聞いた時、パツと頭に浮んだのは「雪山讃歌」である。」にはじまるこの文章をすべて紹介するスペースはもうないが、でだしから吉井勇が出てくる当たり、何となく、当時「やじさん」が、「くわ」と呼んでいたひと、桑原武夫の気配が感じられる。「雪よ岩よ我が宿り・・・この歌の著作権を取っておけば良かったのだ。そうすれば、ヒマラ

や行きの費用などは、いくらでも出るのだったのに・・・」

京都の第三高等学校の歌として酒戸さんが知ってるうた、「雪山讃歌」は当時流行の「南国土佐」ほどではないとしても、広く日本中に拡がり、大変多くの人に歌われ、親しまれている。さて三高歌集にすら作者不詳となっているこの有名な歌は誰がつくったのであろう。ということから、三十年代前、昭和二年一月には鹿沢温泉で、翌三年には東大の青木小舎で東大と京大の両山岳部交歓合宿がおこなわれたが、その夜の部で、興のおもむくまま、第一回南極越冬隊長として知られている西堀栄三郎がこの歌を作ったことが紹介されているのである。なお当の西堀は、第二回合宿の帰り途、山を越して高湯温泉で滞在したときに作ったと主張しているが、酒戸さんはじめ「多くの同行のひととの証言では、第一回の鹿沢温泉滞在中に、数日に亘って作られたというのが、どうやら史実のようである。——中略——ただ、この題名は誰が付けたのか、今もってわからない。」近藤先生の文章も、工楽さんたちが関温泉でこのでき立ての雪山讃歌を歌ったという事実が記されているのであって、そこで初めて歌われたと言っているわけではない。これで発祥地についての「真実」に疑問をささむことは止すことにした。ただし前出の西堀さんの文章にはつぎのような一節がある。「わたしは岩登りも沢歩きも一通りやって見たが、やはり雪山の方が好きである。真白なスカイラインにくぎられた紺碧の空。今から四〇年も前に関温泉で初めて見たこの景色は、わたしを終に南極まで行かせてしまった。」やはり関温泉への思慕も深く、わたくしたちはそこにも雪山讃歌の世界をみるおもしろい。酒戸さんの文章に戻ろう。そのあとが面白い。なぜこの歌がこんなにまではやるのか、

宣伝しているわけでもないのに。しかも「この歌の文句は、全体としても必ずしも名句と言え難く、中には甚だ幼稚な句も存在している。」と手厳しい。さらに「町には住めないからに」などというのは京都弁まる出しではないか。それが全国にはやるから不思議である。」と大阪人「やじさん」の批判が続く。ここらあたりは失礼ながらわたくしも同感である。しかしさきにも述べたが、登山者はこの歌詞には積雪期登山の生活パターンと心情が、リアル、簡潔にまとめられているところ、一般の人々にとってはマーチ風の快活なリズムとともに、歌詞が日常生活と山登りのある種のアナロジーを感じさせるところが受けたのであろうか。こうした傾向をダークダックスの歌唱法とイメージがさらに助長した。

「明日は登ろうよあの頂きに。」

さて酒戸さんは、「本人は恥ずかしがつてだまつているが、著作権使用料はともかく、彼の作ということは知っておいてほしいものである。」と締めくくる。これが掲載されたのは文芸春秋の五月号であるがその発売直後、酒戸さんはノシヤック向けて出発されたはずである。わたくしたち送り出し役は、羽田空港からの出発前、東京で先生と朝食を共にしたが、諸手続にいかにも忙しいか、にもかかわらずボンパンこと吉井副隊長がいかにもんびりして隊長がやきもきさされるか、などの話ばかりで、勿論こんな文章を置きみやげにして行くなどという話は聞く暇もなかった。

あのころのAACKは、まさにカンパニー（総合商社？）で、人事はともかく外交を含む総務、会計にはそれぞれ担当の重役クラスの先輩が当たっていた。雪山讃歌の著作権を取得して、法人としての経理の円滑化をはかろうというアイデアがどこから出たにせよ、すぐそれを実行に移すとい

うところに当時の底力、機動性のすごさを感じる。先輩のなかでそれぞれに役割がおのずと決まっていた、酒戸さんは遠征に出る前にひと仕事してゆくことを求められ、作詞の中心人物西堀さんを中心に、文教専門委員である工楽さんは、山岳会法人化のしごとにくらべると、素人にはともかくとして、さして難しくない歌詞著作権の取得を画策したのであろう。チヨゴリザの準備中になにかと桑原さんを応援した土倉さんが、伊藤がいたように仕掛人であったかも知れない。桑原さんはチヨゴリザ登頂成功だけでなく、多くの同期の仲間を糾合して証人とし、雪山讃歌の著作権を後輩のために残すために大きな役割をはたしたものと思われる。またその後の著作権が会に対して大いに貢献したのは主としてダークダックスであらうか。だれか関東グループのメンバーによって、これらへの感謝の気持ちをつたえてもらっても悪くはない。しかし気配りの西堀さんはすでにこれらと面識があったかも知れない。などと書き出せばきりが無い。いづれにせよこの歌の誕生は、笹が峰ヒュッテの誕生とほぼ時代を同じくしている。現在、新しいヒュッテをはじめ、次代のための大きな遺産が中堅の会員によっていろいろな分野で築かれつつある。今度はそれらが人類共通の使用権をみとめる壮大な遺産、音楽で言えば「交響曲」として笹が峰に響く日を待ちのぞみたい。

チヨモランマ登頂狂騒曲

安仁屋 政武

私はここ数十年、山に関する本をほとんど読んでいない。したがって、今ヒマラヤ登山に何が起こっているのかに疎い。その私が一月から立て続けに「Into Thin Air」(著者Jon Krakauer)「The Climb: tragic ambitions on Everest」(Anatoli Boukreev and G. Weston DeWalt)「Dark Shadows Falling」(Joe Simpson)「South Col」(Wilfrid Noyce)を読んだ。最初の二冊は例の一九九六年五月十日のチヨモランマの日本人を含む大量遭難に関するも、「Dark」は前半がチヨモランマの遭難を軸にして登山倫理に関すること、そして最後は言わずと知れた一九五三年の初登頂の時の記録である。

これらの本を読む気になったきっかけは、昨年十二月パタゴニアの帰りにアコンカグアへ行ったとき、日本から来たメンバーが持っていた「Into Thin Air」をパラパラと拾い読みしたことである。この遭難のとき私はエディンバラ大学に滞在しており、現地の新聞で読んだ記憶があるが、それほど興味がなかったのも単にまた大量遭難が起きたか、という程度の認識であった。しかし、Jonの文章は興味をそそるものであったので、帰りにダラス／フォートワース空港の本屋でこの本を探した。この時「The Climb:」が隣りにあったのでついでに買った。Simpsonの本は十月にモントリオールへ国際会議で行った折り、マギル大学の本屋で買った。冒頭にチヨモランマでの遭難のこと

が書いてあったからである。Noyceの本は一九九六年にエディンバラの古本屋で見つけていつか暇になったら読もうと買っておいた。

なぜJonの本に興味を憶えたかというと、まず第一にチヨモランマの混雑振りである。五四〇〇メートルのベースキャンプに最近では毎年テントが二〇〇張り以上、四〇〇人以上の人間が集まるということ、そして商業登山である。私にはチヨモランマのベースキャンプが五月の連休の涸沢のようだとはいままでの驚きであったし、一人六五〇〇〇ドル(八〇〇万円弱)というとても大金を払ってガイドについて登るというのに大きな違和感を持った。そしてたまたま拾い読みしたところの「ヤスコ(難波康子)はアイゼンの使い方を知らない」とか「ロシア人のガイドBoukreevの客を無視した勝手に見える行動」という文も興味をそそった。

「Into Thin Air」の著者Jon Krakauerは、遭難したニュージランド人のRob Hallが主催するAdventure Consultant Guided Expeditionに顧客の一人として参加しており、ヒマラヤの経験はないが二〇代の時、北米・アラスカでかなり厳しい登山を経験したジャーナリストである。チヨモランマの商業登山を報告するのが目的で雑誌「Outside」から派遣され、遭難の渦中にあつてかなりの部分を体験・観察している。したがって、文に迫力あるのは当然といえよう。彼自身が相当な技術をもった山屋なので、商業登山の客としてチヨモランマに行くことになりの戸惑いがあったが、世界一の名の前に疑問を感じつつ参加している。けれども、登っている時はガイドの言うとおり、指示どおりに行動しなければならぬという、シエルバが張ったフィックスロープをたどったわかってなにも考えずに黙々と登って行くことに苦痛

を感じている。そして「登山の楽しみは自分の経験と技術から置かれている状況を常に把握して判断することにある」が「ガイド登山はこれを一切はぎ取ってしまうのでおもしろくない」と言っている。

Jonは遭難に至る頂上アタックの日のロシア人のガイドBoukreevの行動をかなり批判的に書いているので、ロシア人はやっぱりエゴイストでダメだ、という印象を私は受けた(しかし、実際にはそうではないことが他の二冊の本を読んで判った。ジャーナリズムの影響はやはり恐ろしい)。そして彼なりに遭難原因を分析した後、人は過去の遭難からあまり学ばないと言っている。読んだ印象では今回の遭難は引き返す時刻を守らなかったことにある(なぜ守らなかったということに関して、いろいろと推測している)。登りたい一心で、これ以上突っ込んだら帰りの酸素が無くなり、足元が見える内にサウスコルへ戻れないと判つていても数人が頂上を目指し、帰ってこなかった。そして二週間後に南アフリカ共和国隊の一人が五時過ぎに頂上へ立ち帰って来なかった。全く同じパターンで遭難死しているのである。これも多分に大金を払っている商業登山ゆえのことではないだろうか。すでに千人以上登っているが、これほどまでに世界一は魅力的なのであろうか。

次に読んだ「The Climb:」は批判されたロシア人Boukreevの話を中心として書かれた本である。彼は遭難したもう一つの隊、アメリカ人のScott Fisherが率いるMountain Madness Guided Expeditionのチーフガイドで、彼の行動を中心にDeWaltが隊全体の行動をまとめたものである。この本で印象に残るのは、Jonが責めた行動が実は隊長のFisherとRob Hallの了解を得ていたことである(この二人が死んでいるので確かめよ

うがないが)。客をおいて早く下ったのは万が一に備えて酸素ボンベを荷揚げするためとのこと、Jonの批判は非常に心外であると述べている。

遭難が起きてからのBoukreevの行動は信じられないほど超人的である。彼は一〇日の夜中三人を救助したが、力が尽きてヤスコを助けられなかったことを非常に悔やんでいる(ヤスコはRob Hall隊なので、彼は自分の隊の客三人を最初に助けた。一九九七年にインドネシア隊のコーチとして登頂した後、彼女の遺体を石で覆い埋葬している)。さらに翌一日の午後、仲間から見殺しにされたBeck Weathersが文字通りゾンビのように自力で歩いてきてテントの側で倒れた時助けたのも彼である。この後、八四六〇メートルで意識を失っていて、救助に行ったシェルパが「助からない」と言っただけで見て捨てたFishbeを助けに夕暮れの悪天候の中を一人で行っている。これを読むと、Boukreevに対する印象がJonの本の時とは一変する。また八〇〇〇メートルの高所で仲間にも二回も見殺しにされながら生き永らえたWeathersの生命力にはただただ驚嘆するのみである。

「Dark Shadows Falling」は最近の遭難を取り上げて、登山倫理に影が落ちていることを指摘している。内容は一九九二年のサウスコルでの衝撃的なことで始まっている。それはオランダ隊のテントから僅か二〇メートルの所でインド人が死にかけていたが、隊長は登頂が第一なので隊員に助けることを禁じた、というものである。そして破れたテントや酸素ボンベが散乱しているかたわらにシェルパの死体があたかもゴミの一つのように転がっているサウスコルの写真も胸をつく。Simpsonは死ぬとわかっていても、なぜ側において手の一つもとってやらなかったのかと疑問を投げ掛けて、内容は昨今の登山倫理へと発展していく。

一九九六年の遭難のことにも言及しているが、彼はBoukreevの行動を称賛している。そして、これとは対照的に、チベット側から同じ時期に登頂した日本隊の行動を痛烈に批判している。それは北東稜から頂上をアタックした日本人二人が、前日のアタックに失敗して引き返す途中動けなくなつてうずくまっていたインド隊三人の脇を、行きも帰りも飲食物や酸素の提供はもちろん、声もかけずに通り過ぎ見殺しにしたことである。本には皮肉を込めて(と私は思う)、得意満面の登頂した日本隊の二人の写真のせているが、「遭難しているインド人を見殺しにして登頂した日本人」という説明を読むと慄然とする。Simpson自身一九八五年ペルーのアンデスの山を二人で登攀中クレバスに落ち、どうしようもできないパートナーがザイルを切つて一人で下山し見殺しにされた経験を持つ。彼によると一人で死ぬのが怖くて、片足骨折しているにもかかわらず四日間さまよってベースキャンプにたどりつき奇跡的に助かった。これを読んでいる時、一九八二年のミニヤコンカの松田宏也の奇跡の生還が頭に浮かび、そして北鎌尾根で「有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス」といつて遭難死した、松濤明のことを思った。であるから、彼の山の遭難の際の行動の批判には説得力がある。商業登山に参加するのは数百万円、個人で行っても入山料に何百万円も払っているのに、目の前で人が死にかけていても、自分の登頂欲を満たすために見殺しにする、という現在の風潮を批判している。

この本では他の日本隊もかなりバカにして書いている。例えば、ある隊は自分達はベースキャンプにずっといてなにもせず、ルート工作、フィックス張りすべてシェルパにやらせた後、シェルパにくつついて頂上に登ったと書いてある。これを

読んでいて、二月にNHKで見たある日本隊のヒマラヤ登山の記録を思い出した。この中で、隊員達はキャンプでごろごろしていて、シェルパ達が山へのアプローチを見つけ、山ではフィックスを張りラッセルし、隊員はシェルパの後にただくついて登っているだけであつた。私はこれを見ていて、なにおもしろくて登っているのだらうかと思つた。ルート探し、ルート工作、トップでラッセルと、山登りの最高の楽しみを全て放棄しているのである。この番組を見ていたので、読んでいて、なるほどな、と理解できた。いずれにしても、技術はたいしてないのに、金にあかせてシェルパを大量に雇い、ヘリコプターを駆使して入山し、傍若無人に振る舞う日本隊には相当厳しい目を向けている。

最後の「South Col」は文章が冗長なこともあり、斜め読みをしたにすぎないが、四〇年間でヒマラヤ登山がいかに変化したか、改めて感じさせるものであつた。最初の三冊を読んだ後、一服の清涼剤のように感じた。登山装備や衣類の進歩、技術の発達、個人で手軽に行けるようになったこと、入山料の値上げ、商業登山の台頭などがいかに登山者の考え方を変え、登山倫理の欠落を招いたかがわかる。

私は、様々な隊のエゴイスティックな行動のことを読んでいて、十二月のアコンカゲアでの経験から、さもありなと思った。それはこのような経験からである。六九六〇メートルの頂上アタックの拠点となる五八〇〇メートルの避難小屋(Berlin Hut)に行った時、ドイツ人の一行とスカンディナビア人(多分スウェーデン人)の一行が二つの小屋を占拠していてわれわれ三人を入れてくれなかったのである。日本の山小屋の感覚から

いえば十分スペースがあったにもかかわらず、満員だとか後から仲間が来ると言って入れてくれなかった。テントを持ち上げていなかったわけでは五四〇〇メートルのNido de Condoresに置いたテントに戻らざるをえなかった。しかし、次の日にテントを持ち上げて一日遅らせてアタックする日程の余裕はなく、撤退せざるを得なかった。特に私の場合、四三〇〇メートルから五八〇〇メートルまで一日で登って来たので、きつかった。というのは、私は体調が思わしくなかったもので、最後のアタックに二人を五四〇〇メートルまで先行させ、四三〇〇メートルのベースキャンプに残っていた。しかし、その日の夜中に十数回小便に行き、むくみが引いて体調が急速に回復したので、翌日一人で五八〇〇メートルまで登る彼等を追っかけた。五四〇〇メートルまでは快調に登ったが、そこから五八〇〇メートルはやはりきつかった。ようやく登り二人に合流して、いよいよ明日は頂上アタックと言うときに、小屋に泊まれず三〇分前に登った道を引き返すのは肉体的にもさることながら精神的にガクリとくるものがあった。

この時、学生時代の登山倫理が通用しないことを痛切に思い知らされた。このような経験があったことも「Into Thin Air」を読もうと思い、他の本も一気に読んだ理由であらう。

それにしても「世界一」というのは魔物である。Simpsonもプモリの新しいルートの試登の帰り、チョモランマを見ながら、自分から行くとは思わないが、もし誰かが誘ったら断りきれぬだろうかと自問している。私は、ネパールへは一九九七年十一月にネパールからの留学生の案内で初めて行った。その折り、遊覧飛行でサウスコルと同じ高さを飛び、東南稜を目の前に見た。そして冗談半分に「あれなら俺でも登れそうだ」と一瞬思

った。私も自分から行きたいとは思わない。しかし、仮に誰かが行かないかと誘ったら、ちょっとは考えるのではないかという気がする。その理由の一つは世界一だからである。世界で初めてというのはもちろんであるが、世界一というのでも多くの人にとってやはり魅力的なものではなからうか。いや「〇〇一」でも十分かもしれない。私がアコンカグアに登ろうとしたのも南北アメリカの最高峰ということが大きな理由だし、キリマンジャロに登ったのも氷河と氷河地形を見る以外にアフリカの最高峰でもあるからだ。また、世界で初めてでなくても、「〇〇」（日本人、女性、最高年齢など）で初めて」でも多くの人にとっては十分に魅力的なのだろう。

久々に山のことを考えた一九九九年初頭であつた。

「レニエ山、一九六九年」

松浦 祥次郎

去る三月、潮崎バイマン氏のお誘いを受け、六甲ロックガーデンを初めて訪れた。午前中は幸い天候にも恵まれ、瀬戸内海の景色を満喫しながらのハイイクであった。その途上、話が自然にAAC K諸氏の近年の海外山行に及び、この夏には米国西海岸ワシントン州のレニエ山（一四、四一〇フィート）を何人かが目指しているのを、同行の新井浩氏から聞いた。レニエ山とその周辺のカスケード山脈の山々には、若い頃に多少の思い出もあり、新井氏に促されて、小生のレニエ山登頂をAAC Kニュースに投稿する仕儀となった。ところ

が、いざ書こうとしたら、きちんと片付けてあつたはずの当時の記録が全く見つからない。何度かの書類整理の間に、何処かに埋もれてしまったらしい。仕方なく、ブックセンターで手に入れた「レニエ山国立公園」の地図を頼りに、あいまいな思い出をたどって書くしかないかと悔やんだ。しかし、念のため一九六九年（昭和四四年）にレニエ山と一緒に登ったダベンポート夫妻にEメールで当時の記録について問合せをしてみたところ、彼等は誠に親切にも早速に、その年のクラブ年報からレニエ登山の部分メールバックしてくれた。ダベンポート夫妻に心から感謝しつつ、クラブ年報の翻訳で投稿の約束を果たしていたこととする。ちなみに小生は、一九六九年一月から一年間、ワシントン州のバツテル記念研究所に一年間留学し、その際、町（リッチランド市）の登山クラブ（IMAC: Inter-Mountain Alpine Club）に入り、ワシントン州、オレゴン州、そしてカナダ（バンフ国立公園）の山々をかなり楽しませてもらった。今のところレニエ山頂が小生の最高到達点である。レニエ山は、緯度が北緯51度90分付近にあるだけに、山頂近傍は全面的にすっぽりと氷河に覆われており、難しくはないが堂々たる山容の大山である。

レニエ山、一九六九年七月一九—二〇日（米国西部標準時）

天候は晴朗そのもの、これ以上は望むべくもない程であった。勿論、もう少し風が弱ければなお一層良かっただろう。しかし、何処の山でも、頂上では常に多少は風があるものだ。さもなくば静かすぎる。ともかく、素晴らしい山行であった。

とは云へ、いつもの通り、やっぱり相当にきつい登高であつた。

パークサービス(公園管理官)は、以前のように、ひとりびとりの登山装備を念入りに検査することはやはりしない。その代わり、各人がIBM計算機のパンチカードのような用紙に要求されている事項を記入しなくてはならない。例えば、これまでの登山経験とか、携帯している装備のリストなどである。パーティのリーダーが安全と準備に全責任を負い、パーティを適切に指揮することが求められている。そして、もし事故が発生した際は、リーダーが公園管理官に報告しなくてはならない。

金曜日(十八日)の夜の間に、スターボ(Starbo)まで車で入った。土曜日(十九日)の朝、全く雲の無い晴天の下、スティームボードプロウ(Steamboat Prow)へ上り、丁度正午にシャーマン小舎(Schurman Cabin)にたどり着いた。風の状態が悪くなった時のことを考えて、小舎の下方にキャンプをした。我々は真夜中に起床し、午前一時三十分に行動を開始した。しかし、登りはじめて直ぐにタコマ山岳会の大グループに追いついてしまった。そして標高差三、〇〇〇フィート程の間は、登るも止まるも、我々の行動は、その大グループの動きに左右されることとなってしまった。とは云へ、ステップのレーンが一行にしっかりとできていて、氷河の上で、大グループを追い越すことなど、とうてい出来ないことだったのだ。我々は十時三十分頂上にたどり着いた。良いピッチの登高とは言えないが、大グループの後について行くのもそんなに悪いものでもなかった。

エモンズ氷河の景色は全く圧観であつた。写真のため、何度もポーズをとった。我々は二時間ばかり頂上にいた。誰もが十分に頂上周辺を楽しむことができた。頂上の記録帳にサインをし、風かげの所で昼寝を楽しんだものもいた。午後三時四五分には氷河のつつきのプロウまで下山した。雪は完全にぐさぐさになり、道すじには二フィートの深さのパドルもできていた。丁度、下山している途中、ラジオのニュースでアポロ十一号の宇宙飛行士が人類史上初めて月面に降り立ったことを知った。エモンズ氷河をふりあおぐと、ルートの左上の方に月があつた。実際にその時、人間がそこで仕事をしていたのだ。(以上 IMA C年報より)

ワシントン州からオレゴン州にかけては、いくつかの立派な火山が並んでいる。一九六九年には見事な姿をしていた「ヘレン」は、その後大爆発で頂上四〇〇メートル程がふつとんでしまった。フッド、アダムス、ベーカー、ジャクソン等々も日本にあれば確実に名山に入る。カスケード山脈はカナダからワシントン州の中央部を北から南にかけて延び、州を東西に分断する山脈、山地である。その名から想像できるように滝の多い山で、コロンビア河の水源をなしている。スケールは想像以上に大きく、全く良い所で一年を過ごしたことであつた。

山仲間を通じて、いくつかのアメリカ人気質に触れることができたのも良い経験であつた。レニエ山には渡米以前から登りたいと思っていたので、一応の装備はもっていつていた。研究所の人にその話をすると、「レニエ山はかなりの山であ

り、パーティを組んで行く必要がある。リッチランド市(人口約二万五千人程)にはIMACと云う登山クラブがあるから、それに入るのが良い」とすすめたくれた。早速IMACのリーダーに電話で聞いてみると、「レニエ山はある程度の経験者でないと無理だ。もしIMACに加わって今夏の登山をしたいのならテストをする。ついては、次の週末にこれこれの所で岩登りの練習をしているからそこに来るように」とのこと。週末に指定された所へ行き、言われたことをすると

「君は大分岩登りをやったようだ。ついては、今、コーチが足りなくて困っているの、コーチになつて呉れないか」と言う。こっちはすっかり驚いてしまった。受験生が直ぐに先生にされるのだから。しかし、アメリカ社会のあつからんとした実力主義の一端に触れる感じがして、極めて印象的な経験であつた。ともかく無事IMACに入会を許され、レニエ山にも計画通り登ることができ、その年は、IMACの最も活動的なメンバーの一人として、良い一年を過ごすことができた。

(一九九九年五月三十一日記)

記録

北ア・立山山頂から 剣岳北方・毛勝山間での スキー滑降

高尾 文雄

以前、立山から槍までのスキーをフルに使ったルート滑ったが、今回は立山から剣の北に向かつてスキーでどこまで楽しめるかをトライしてみた。御前谷、内蔵助谷、剣沢、小窓谷、西仙人谷、白萩川、ブナクラ谷、折尾谷、西谷、東又谷とつなぎ、結果として四日間のトータルのスキー滑走は標高差五千六百メートルを越えた。

五月一日(土) 快晴

室堂十時十分～十一時二十分一ノ越～十二時三十分雄山～十四時 標高二二〇〇メートル登り返し点～十四時三十五分二二〇メートル立山中央山稜コル～十五時内蔵助平

室堂から入山するが、今年は例年並みの積雪。一ノ越からはスキーを担ぎ重荷に喘ぎながら雄山に登った。雄山神社の直下から御前谷を滑り降りたが、この谷は滑る人もほとんど無く、広く斜面も急で大変すばらしい。しかし、今回は雪が悪く苦労した。山スキーヤー一人に出会ったが、途中で右岸尾根を越えてタンボ沢の方へ滑り降りてい

った。我々は途中で左の尾根(立山中央山稜)を越えて内蔵助谷に移り更に滑り降りた。内蔵助平まで滑って本日は標高差一四二〇メートルの滑走で終了。天気も良く快調。

五月二日(日) 晴れ

内蔵助平六時十五分～七時十分ハシゴ谷乗越～七時五十分剣沢二股～十一時十五分小窓～十二時五十五分西仙人谷と大窓からの出合～十四時五分ブナクラ谷出合～十六時二十分ブナクラ谷一三〇メートル

本日も晴れて快調にスタート。ハシゴ谷乗越からはクラストの滑降で剣沢まで快調。二股までは雪も多く、沢を渡るのも苦労はなかった。二股には大窓ツアーの人が多かったが、小窓に登る人はほとんどいない。小窓に着くと北方稜線を行く人で賑わっていた。小窓から反対の西仙人谷に入った。出だしは雪が無く、少し歩いて下りてからスキーを付けた。大変急で緊張した。誰かスキーで降りた跡があったが、階段歩行で下りていた。我々はジャンプターンで滑り降りた。急で狭く喉のようなところが続く。左右は高い岸壁で日本離れした景色の中を慎重に滑る。途中デブリで谷が埋め尽くされスキーを外したところもあったが、何とか大窓からのルートに合流した。白萩川は雪は重い、傾斜もなく別に気を使うこともなく滑れた。途中一九八〇年の冬に遭難し、八一年春に白萩川で発見されたアオカン、カセンにお参りした。今年は渡渉の必要なしに取り入れ口まで滑れた。取り入れ口からはスキーを担いでブナクラ沢

の出合まで行き、こんどはブナクラ沢に登る。取り入れ口から先は雪も続いており、シールで登れた。上からたくさんの方が下ってくる。山スキーもいた。デブリがいっぱいで、歩きにくい。一三〇〇メートルまで登ったところで、デブリのない安全なところにテントを張れた。本日の滑走標高差一七九三メートル。

五月三日(月) 曇り

出発六時十五分～七時四十五分ブナクラ乗越～九時十分折尾谷巻き始め～十一時十五分から十二時西谷(中谷)巻き終わり～十二時八分西谷出合～十六時平杭のコル(一七五〇メートル)

ブナクラ乗越まで登っている間にもう下からスキーヤーが上がってきた。この時期はブナクラ谷は人が多い。折尾谷はスキーで下るのに絶好の谷。広くて見通しが利き、デブリもなく傾斜もスキーに丁度良い。ただ、雪は腐っていて上部は難しかった。一気に下るが、標高九〇〇メートルからは雪がなくスキーを担いでのヤブこぎとなった。段丘状になったところを雪を拾いながら左岸を高巻いた。途中で太くて立派なコゴミを見つけ、今晚のおかずには摘んだ。西谷と中谷が別れる手前まで行くと、段丘は終わり急斜面となっていた。段丘の切れ目の急斜面を強引に下りて、更に落石地帯をトラバースしてゴルジュをやり過ごし、何とか雪の上に下り立った。そこからはシールで西谷に登る。熊やカモシカを遠くに見て、人気がないデブリの斜面をひたすら登った。最後の喉のようになった急斜面はスキーを担いでアイゼンで登る。

コルに上る手前には巨大雪庇があり、ピッケルを取り出し左に弱点を見つけコルに登った。本日の滑走標高差は八五〇メートル。

五月四日（火） 雨

出発八時～十一時四十五分から十二時半毛勝山～十四時半取り入れ口手前の最初の堰堤～十五時二十分橋（標高八四〇メートル）スキー終わり～十七時二十分第四発電所～十八時第三発電所下（タクシー）

昨晩からの雨がひどくなり出発を見合わせた

が、予報では更に悪くなるとのことでの出発する。ガスが発生してきたが、思ったよりも天候は悪化せず、ひたすら毛勝山を目指してスキーを担いで登った。雨は降り続く中をなんとか頂上まで行ったが、頂上付近は強風でしかも雪崩の恐れがあり、予定した毛勝谷はあきらめ東又谷を滑った。頂上直下から滑り出し、足元から重い雪が流れ出すのも構わず行く。雪は最悪だが、広い斜面はなかなかスキーに適している。途中のゴルジュも中を行き、滝も横を歩いて降りれた。堰堤に出会うところまで来ると、雪もとぎれとぎれになり渡渉する事になった。標高八四〇メートルまで来ると、さすがにスキーでは下れなくなり、山菜を摘みながら歩いた。結局最後まで雨は降り止まなかった。携帯が通じるところまで歩いて、タクシーを呼んだ。本日の滑走標高差は一五六〇メートル。

今回の山行は技術的にはそれ程難しいところではなかったけれど、体力と総合力を必要とするルートであった。天気は恵まれ、雪の量も多かったが、

雪質は最悪であった。

『メンバー』高尾文雄（三九）、田中博之（四二）、片岡泰彦（四三）（以上JACC）、加藤正一（四四）、芝田之克（四五）。

談話室

●既に一部の会員の方々には話しましたが、去る三月二八日から、関空：昆明間にJASの直行便が毎週水・日の二日就航しています。これを利用して四月七：十一日に昆明・麗江・大理を一回りしてきました。昆明では今年の五月一日から十月末日まで花の万博が開かれるため、空港のターミナルビルが完成直前でした。その他至る所で工事が進められていました。昆明←麗江と大理←昆明の間は、雲南航空の定期便を利用しました。現地で聞いたところでは、中旬にも空港を建設中で、完成次第定期便が飛びそうです。昆明←中旬間の定期便が開設されたら、梅里雪山のアプローチがぐっと便利になることでしょう。日程の都合で、梅里雪山に接近できませんでしたが、麗江では玉龍雪山五五九六mの麓まで行ってこれを眺めて帰ってきました。次回は梅里雪山を拝みたいと思っています。

（本仁久一郎 寝屋川市）

▲梅里雪山を回る巡礼の旅を企画して戴きたくお願いします。（新井）

●山の細い道を登り降りするとき、向こうからきた人に、「こんにちは」と小さく声をかけてみる。相手が男か女か幾つぐらいの人が、はたまたキツ

ネかタヌキか化け物か、不安に駆られて声をかけてしまったのかも知れない。このとき何の返事も返ってこなくて不安の増すこともあるが、大抵は「やあ、こんにちは。頂上はもうすぐですよ。」などと明るく大きな声が返ってくる。山に登って良かったなあと思うのはこんな時である。都会のエレベーターに乗る前に、「お先にー」とか何か互いに声を掛け合う習慣があれば、都会の生活はもっと不安やストレスの少ない安心な生活になるのではないかと思う。下から登ってきた人が、コンニチワと声をかけてきた。振り返ってみると、外人さんであった。山での挨拶は万国共通のものかと思う。日本は山国であって古くから柴刈り、お花見、歌垣、と山野で楽しい生活を送ってきた。山は亡き父母、先祖の眠っているところでもある。私達が山登りに求めるのは、身体を丈夫にしたいとか、美しい自然にふれたいと言つことのほかに、都会の騒音から逃れて、太古の昔に返って人間本来の本能、五感を呼び覚まし、精神のストレスを解放し、心の疲れを癒したいとの思いからきているように思われる。

（小川芳男 尼崎市）

▲美濃丹伏山に御一緒したとき、「岩影にまた一つあり春リンドウ…よしお」「おしゃべりの登りは早し二輪草…ひろし」と楽しみました。

（新井）

●私は三月三二日をもって京都産業大学を退職し、四月一日から熊本大学理学部環境理学科の一員として着任しました。与えられた時間を環境理学の概念の確立と地球史の解明に、そして次世代

の育成に微力を傾注する所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

(能田 成 熊本市)

●このたび、指導教官の移動に伴い、再び京都にて物理学の研究に携わることとなりました。未だ大学院の学生の身分ですが、博士号取得に向け、以前にも増して努力したいと思います。今後とも宜しくお願い致します。

(中村 真 左京区)

速報

『遺体発見の通知』

五月二五日、雲南省体育運動委員会より「明永氷河で頭部と足の無い遺体及び周辺に遺品等が発見された。」とFAXが入った。その後、昆明との連絡の上、京都で打ち合わせ会がもたれ、次の通りの処置が決まった。

一、六月二七日関西空港発で、人見、中川、小林の三名を派遣する。

二、今回発見の遺体の確認及び収容作業。

三、小林が残留し、今夏のバトロールを行う。

四、イリジウム携帯電話機を持参し、京都の本部との連絡を行う。

五、本部責任者は岩坪が当たり、京都在住の吹田、伊藤、竹田、中山が補助する。

以上。

お知らせ

○梅里雪山法要

昨夏、中国雲南省で発見、収容された第二次梅里雪山峰学術登山隊隊員の慰霊法要を、四月二四日比叡山延暦寺阿彌陀堂にて営む。遺族や会員ら約七十名が悲しみを胸に故人の冥福を祈った。午後は横川の慰霊碑で納骨法要を行った。

○AACK総会

五月二三日、京大会館にて一九九九年年度の総会が開催された。事業報告、決算及び事業計画、予算が可決された。詳細は別途各位に送付される予定。

○笹が峰ヒュッテ改築工事

改築委員会田中二郎教授によると、設計の細部にわたる詰めも終わり、後は着工手続きを済ませるだけとなり、七月四日(日)に起工式、十一月三日(文化の日)竣工式を予定しているとのことであった。御馴染みのヒュッテが姿を消すのも間近かとなった。尚、募金は、ほぼ目途がついたが、目標額には未達で、協力依頼を続行中の由。よろしくお願い致します。

会員動向

○新入会員

西川大輔氏 (農・農工、一九九九年三月卒)

○物故会員

中村金夫氏 一九九九年二月二日逝去

編集後記

今号にて編集長を交代します。紙面を通じて会員の団結と親睦に、情報伝達に些かなりの貢献を為したかと考えます。次は沖津文雄さんで、吹田、竹田の両君が引き続き補助役を勤めます。親しみのもてる、興味ある記事が掲載されるよう期待します。

速報にあるように、今夏のバトロール役の小林君には、大変御苦勞様と申しあげたい。と同時に梅里雪山の宿題を解く鍵を見付けて、曼陀羅の終結を為し遂げてほしいものです。

長い間、御愛読頂き有難うございました。次の原稿締切は九月十日です。(新井 浩)

編集委員 新井 浩、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 一九九九年六月一二日

発行所 京都大学学土山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 氣付

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所